慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	まちづくり活動の生成と展開の過程に関する調査研究 : 関係者の行為に着目して
Sub Title	
Author	山田, 賢司(Yamada, Kenji)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2009
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.68 (2009.) ,p.166- 168
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成20年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000068-0166

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

38, No. 2, pp. 40–63.
菊地栄治・永田佳之，(2001). オルタナティブな学び舎の社会学：教育の〈公共性〉を再考する．教育社会学研究．第68集，pp. 65–84.
北山由実，(1999).〈登校拒否〉経験の物語性について．立教大学教育学科研究年報．42号，pp. 119–132.
久富善之編著，(1993). 豊かさの底辺に生きる―学校システムと弱者の再生産．青木書店.
永田佳之，(2005). オルタナティブ教育：国際比較に見る21世紀の学校づくり．新評論.
岡原正幸，(1998). ホモ・アフェクトス―感情社会学的に自己表現する―．世界思想社.
酒井朗・伊藤茂樹，(2001). 不登校児のケアにおけるボランティア活動の社会的意味―児童相談所におけるメンタルフレンド活動を中心に．お茶の水女子大学人文科学紀要．第54号，pp. 159–176.
崎山治男，(2005).「心の時代」と自己：感情社会学の視座．勁草書房.
瀬戸知也，(2001).「不登校」ナラティブのゆくえ．教育社会学研究．第68集，pp. 45–64.
住田正樹，(2003). 子供たちの「居場所」と対人的世界．住田正樹・南博文編．子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在．九州大学出版会，pp. 3–20.
住田正樹，(2004)，子どもの居場所と臨床教育社会学．教育社会学研究．第74集，pp. 93–109.

まちづくり活動の生成と展開の過程に関する調査研究

――関係者の行為に着目して――

山　田　賢　司

1．問題の所在

近年，まちづくりを志向するNPOやボランタリー・アソシエーションなどの団体の活動が増加傾向にあるといわれている。日本語の「まちづくり」という言葉のなかには，大抵の場合，「市民相互の協力や，市民や行政などとの協働を通して，特定の地域における生活上の課題を解決し，住みよい地域社会を形成すること」という意味合いが含まれている。こうした意味合いは，個人ではなく地域における共通の生活課題の解決をめざしている点で，また，そのためにさまざまな立場の行為者の参加を想定している点で，市民に共通する「共約的価値」に焦点を当てた定義だといえる。そして，実際に行われているまちづくりの活動は，こうした「共約的価値」を実現しうるかどうかに基づいて評価されることになる。

しかし，実際のまちづくりが「共約的価値」を実現することができるかどうかは定かではない。現実の地域社会において，考え方や属性の異なる，多様な住民（個人）が居住していることを考慮するならば，「共約的価値」の実現はむしろ，非常に困難であることが予想される。

ところで，まちづくりは，町内会・自治会のようなフォーマルな活動あるいは半強制的な活動を除けば，基本的に個々人が自発的に参加することによってはじめて成立する。そして，個々人が継続的に活動に参加するためには，活動の場における相互行為を通じて，彼らが「楽しさ」や「居心地のよさ」といった積極的な意義を見いだす必要があるだろう。したがって，まちづくりの研究においては，実際の活動において，こうした「楽しさ」とか「居心地のよさ」といった「個人的価値」が，どのような相互行為の場面のもとに生起しているのか，また「個人的価値」の内容が具体的にどのようなものなのかと

いった点を，行為の次元から解明することで，まちづくりの現実的な意義や可能性を見いだすことが必要となるのである。

そこで本研究では，まちづくりを「特定の地域に対して，何らかの『良い』と思われる働きかけをすること」と緩めに定義したうえで，まちづくりを行為の次元からとらえる視点を構築し，実際のまちづくりの活動をその視点から観察することで，まちづくりがいかにして生成し，どのように展開していくのか，その過程を明らかにすることを目的とする。なお本稿では，まちづくりの活動を行為の次元からとらえる視点の一つとして，E.ゴッフマンによる「出会い」概念を取り上げ，この概念とまちづくりの関係について仮説的に検討した上で，今後の課題を提示することにしたい。

2. ゴッフマンの「出会い」概念とまちづくり

ゴッフマンは，「直接的に居合わせているふたり以上の集合」(Goffman, 1963=1980: 20)のことを「集まり(gathering)」と呼んでいる。なお，この集まりの場面においては，多くの場合，対面的相互行為(face-to-face interaction)が生起することになる。ゴッフマンは，この対面的相互行為のうち，会話，卓上のゲーム，あるいは参加者の緊密な対面的サークルによって保たれている共同作業などにおいて一時のあいだ，認知的および視覚的注目を単一の焦点に向ける人々が，その持続を事実上同意するときに成立する対面的相互行為のことを，「焦点の定まった相互行為(focused interaction)」と呼んでいる。そして，焦点の定まった相互行為が生起する集まりのことを，「焦点の定まった集まり(focused gathering)」ないしは，「出会い(encounter)」，またあるいは，「状況にかかわりのある活動システム(situated activity system)」と定義している(Goffman, 1961=1985: i–ii)。

この「出会い」においては，「無関係ルール(rule of irrelevance)」と「変形ルール(transformation rule)」が存在する。無関係のルールは，一言でいえば，特定の感情や話題など，出会いの場面においては表出すべきではないとされる事柄についてのルールだといえる。変形ルールは，出会いのなかで，出会いの外部の世界における諸属性を，いかに修正して表現するのかに関するルールだといえる。これらのルールによって，外部世界と出会いのあいだに境界が生まれ，出会いの独自の世界，リアリティを構築することになる。したがって，「出会いのダイナミックスは，より広い世界から出会いを選択的に切り離す環境－維持のメカニズムの機能と結びづけられている」(Goffman, 1961=1985: 63)ということになる。

そして，こうした無関係のルールなり変形ルールなりによってつくられた世界と，参加者が自発的関与の対象として想定している世界が一致するならば，参加者個々人はユーフォリア（euphoria: 多幸状態）ないしは気楽さ（居心地のよさ）を感じることができる。逆に，両者のあいだの距離が開いたならば，個々人のディスフォリア(dysphoria)や緊張につながることになる。

以上のことを踏まえてまちづくりの活動をみるならば，まちづくりにおける「出会い」は，活動を行っているボランタリー・アソシエーションやNPOなどの組織が主催して行う会合やイベントなど，組織の成員や地域のボランティアなどが集まって行う話し合いや共同作業の場面において生起するものだということになる。そうした場面において，参加者が活動に対して想定していた内容と実際の場面におけるリアリティとが一致し，彼らがユーフォリアや居心地のよさといったものを感じるならば，そこでのコミュニケーションは盛り上がり，まちづくりの活動そのものの活性化につながる可能性が高まることになる。逆に，参加者がそうしたユーフォリアなどを感じられないのであれば，活動の停滞や消滅

にもつながる可能性が出てくるということになる。

以上,「出会い」とまちづくりの関連について考察を行ったが，実際のまちづくり活動の場面を「出会い」概念で把握できるのかについては，実際の現場で調査を行うことによって検証されなければならない。その際の課題を，最後に提示することにしたい。

3.　今後の課題

筆者は2008年の春より，千葉県松戸市常盤平においてまちづくりの活動を行っているボランタリー・アソシエーション(常盤平地域活性隊)を対象に調査を行っている。筆者がこの活動の場面を参与観察し，関係者に聞き取り調査も行った結果，まちづくりの現場で共同的な作業により「焦点の定まった相互行為」としての「出会い」が生起し，そこから参加者のユーフォリアが醸成される側面があることを確認するに至っている。この調査の結果については，諸事情によりまだ論文になっていないが，できるだけ早急に論文としてまとめる予定である。これが，本研究の喫緊の課題ということになる。

また，まちづくりにおける「個人的価値」を，より精緻に把握するための理論的枠組みの構築も必要である。すなわち，まちづくりに参加する人たちが，なぜ，その活動のなかの「出会い」に意味を見いだしているのかを把握するための分析枠組みの構築である。おそらくは，個人の生活構造（家庭・職場といった生活上の各場面と，そこでの役割のセット）およびアイデンティティと,「出会い」における相互行為の内容およびそこでの個人の役割とを関連づける枠組みが必要であるように思われる。

引用文献

Goffman, E., (1961). *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction*, The Bobbs-Merrill Company.　佐藤毅・折橋徹彦訳，(1985).　出会い―相互行為の社会学―.　誠信書房.

Goffman, E., (1963). *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings*, The Free Press.　丸木恵祐・本名信行訳，(1980).　集まりの構造―新しい日常行動論を求めて―.　誠信書房.

佐藤毅，(1985).　初期ゴッフマンとその自己論」E.ゴッフマン／佐藤・折橋訳，(1985).　出会い―相互行為の社会学.　誠信書房，199–237

「国民道徳論」の形成過程に関する研究

――井上哲次郎の立論に焦点を当てて――

江　島　顕　一

1.　本研究の概要

本研究の目的は，明治末期に第二期国定修身教科書の解説・普及を契機に鼓吹された「国民道徳論」の形成過程を，その中心的唱道者の一人である井上哲次郎の立論を通じて解明することである。

本年度は，井上が1891（明治24）年9月,「教育勅語」の意義・精神を敷衍し浸透させる企図の下で編纂した『勅語衍義』，および1899（明治32）年3月，増補・改訂して刊行した『増訂勅語衍義』を中心とする諸論考の分析から,「国民道徳論」の核心をなす「家族制度」「忠孝一本」などの形成過程を明